

イエメン・ユダヤ人史【2】

歴史的な真実及び社会的に明白な事実こそが、以下の事を確信させるのである。即ちイエメンのユダヤ人は、イエメンにおいては我々アラブ民族の一部であり、彼等はイエメンの彼等の地方において、ユダヤ教を信奉しているのである。この地方ではイスラーム以降に無かったこと、とりわけ「汝等には汝等の宗教が、我には私の宗教がある」ということが禁止される事は、イスラーム以前にもなかった。そしてトーラー（モーセ5書）はユダヤ人をこう定義している「彼等は「セム民族」の、言語的結び付きのみで一致する一支流である」と。イエメンのユダヤ人について言えば、彼等はイエメンの人々とあらゆる性質において分かつことの出来ない一部分である。それは人種的類似性であるとか、容貌の一致、或いは多種多様なイエメン方言のアラビア語（で話すこと）等の点で、等質である。それはイエメン人がイエメン全土に多種多様に広がっているのと同じである。

私の元へイエメンのユダヤ人を一人連れて来なさい。ユダヤ人であるという理由で、イエメンの別の地域の同等の者（ユダヤ人）と一致する或る特殊な性質を備えた者を。また今日に到るまで、シオニストの社会に別の諸人種と共に同化した一人のイエメン人を連れて来なさい、占領地へ移住する前に定まった彼の性質と（他の人種との一致のない）者を。真実は明白に区別出来る。もしハドラマウトから来たユダヤ人とムスリムを、或いはサヌアーから来たユダヤ人とムスリムとを我々が比較する時、我々は両者の間に外見上の差異を特には見出さないであろう。我々の国は何百年も続いた恐ろしい孤立の中で生きている。故に我々は言う。例えばサヌアーから或いはハドラマウトから来た2人の同国人、2人の内一人はムスリムでもう一人はユダヤ人である者の間に差異を見出す者は誰もいないと。一方例えばハドラマウトの人とサヌアーの人を区別することはたやすく出来る。

我々はイエメンのユダヤ人についての考察を、イエメンのアラブ民族の源についての確定的で包括的な真実と結び付けなければならない。その真実は、道を踏み外した新しい著作や、アラブの歴史上の出来事を抹消しようと努力している外国の著作には、達することの出来ないものである。その様な著作は、それらの出来事を連続しながら、且つその中でアラブのペンを持つ者達が軒をかいていた深い睡眠の期間と一致させながら、記録することに挑戦したのであった。そしてそれらは次の様な歴史的期間でもあった。即ち諸々の出来事を詳細な記録として、自分達自身の苦悩を記録する人々を際立たせることが出来なかった時代である。

（その記録は）教育された古い世代の人々の怠慢に対して、今日悩み始めた世代の人々の為のものである。外国からの侵入者は（古い世代の人々を）その軍隊と武器と文化的能力でもって脅かした。そして（その文化的能力の内）アラブ的な部分は基盤中の基盤であったが、アラブの古い人々は、端的に言えば、このほんの何世紀かの人々よりも注意深かったのである。

(この何世紀かにおいて)「病める人」トルコ人の文明が起り、その後西洋の文化が襲う様に、自己とアラブの名誉の信頼を失いつつ、後退性が深まりながらやって来た。

(この様な歴史的な期間に)以下の様なプロパガンダの拡大と手段とは、この犯罪の実現に一役かっていたのである。(即ち、このプロパガンダとは)植民地主義であり、またアラブの殆どの地域において、文化的、政治的な空隙を利用しようと努力するグループを通じて、「第三世界」へと輸出されるその文化的影響とで、アラブの知性に毒を盛る機会を彼等に与えたところのものであった。

既に多くのユダヤ人の歴史家達(その中には現代における歴史家の大家ルイス・フィנקルシュタインが挙げられるが、それに加えて少なからぬ東洋学者達、その中には巨匠マルグリウスを含めて)を数え上げることが出来るが、そういった彼等が試みてきた事がある。それはユダヤの源流とは、それも全てのユダヤ人は、イエメンに起源するといった虚偽を各世代層に教え込もうとした試みであった。と言うのはこれらを通じて全般的にユダヤ人の源流を証明しようとしたのであり、またユダヤ人は一つの民族であるとか、彼等の内の或る者達が呼ぶ、民族の「ディアスポラ(離散)」という断言を目的とした古典的で、しかも新しい考えで、或る虚構をつくり出そう、という試みのためであった。一方人類学者のユージン・ピットルドは彼の著作「人種と民族」の中で「ユダヤ人は様々な先祖を持っており、キリスト教徒やイスラーム教徒という人種がないのと同様に、ユダヤ人という人種も存在せず、むしろユダヤ人というのは、人種のことを指すのではなく、ユダヤ教を信仰する全ての人種を抱え込んだ宗教を指すのである」と述べている。

ハドーンは純血人種論に関するリペレイの考えについて確証を行っている。即ち彼は「ユダヤ人というのは様々な源流を持つ者達から構成されており、彼等のことを『純血人種』等と唱えることは不可能である」と述べている。

他方或る歴史家達は、ユダヤの歴史の始まりを預言者イブラーヒーム(アブラハム)の到来に帰している。彼は、イラクのウルにいた部族の族長で、彼によってBC1950~1920年頃、パレスティナに向かって移住が遂行されたが、それに当たってパレスティナへ通じる道筋にあたるユーフラテス川を越えたのであった。だがそこには、カナーン人が居住していたことが、聖書の倉世紀により証明されている。カナーン人は起源がアラブ部族であり、彼等はイエメンから移住し、パレスティナの辺境地に居住していた。そしてこの時以来、この地はトーラーや古代エジプト史で知られる「カナーンの地」として呼び習わされる様になった。アラブ部族のアラブ諸地方への移住は、アラビア語を話す人種の数多くの地域への移動、それはアラビア人を大アラブ圏やアラブの諸征服地へと到達させ、或いはアラブ民族の大望に呼応して、より遠くの地へと到達せしめた移動、と言う枠組み内の日常的な移住の一つとして見做されている。

イエメン以外のユダヤ人は一つ以上の名前を名付けられており、それらはヘブライ人とかイスラエル人或いはヤアコーブ(即ちイスラエル)の息子のヤフーザ(ユダ)である。歴

史家の幾人かの企てとは、思慮不足の為にイエメンのユダヤ人はパレスティナへとバーク・アルマンダブ海峡を横断した、と説明したり、「全てのユダヤ人は横断者である」といわれる間違った事実へと到達させるべく、従ってユダヤ人は「一つの根源」とする主張を正当化して説明しているのだが、歴史上の出来事が、この不明瞭さとその拡散を語っているのである。

事実、全てのシオニストやユダヤの消息筋は過ちを含んでいて、更にシオニストのイデオロギーの出現の後に到るまで、同様に事実の偽造を試みている。それはパレスティナの地にシオニストの存在を建設する目的のために奉仕する為であった。

－ 拡張と根源の間のユダヤ人 －

アラブ人とユダヤ人との紛争は事実であり、また歴史上の根源を有しており、アラブの地、特にアラビア半島においてのことである。この事はユダヤ人が王国や権力を持つ以前の事であり、その後も同様であったが、アラブ人に対してユダヤ人が優勢を実現した折りのことで、アラブが分裂する時には常に起こった事であった。ヤスリブ（メディーナ）において彼等の力が強くなった折り、アウス族とハズラジュ族に対して彼等は威丈高となった。そしてそれはアラビア半島の南部、即ちイエメン北部及びその東南部でのことであった。ユダヤ人はこの分野において語るには、紙面が不足する様な一連の罪を犯している。そしてユダヤ人とムハンマドとの会話を通じて、イスラーム以後アラブ人とユダヤ人との立場は分裂し始めることとなった。その中でユダヤ人は旧約聖書の中でメシアを約束されていて、ムハンマドが新しい宗教の中で「啓典の民の中の一部は、アッラーの啓典をまるで知らないかの様に背後に捨て去った」－第2章（牝牛、バカラ章）第101節－と告げにやって来た時、「あなた方が持っているものを確証するために、我（アッラー）が下したものを信じよ」－第2章（牝牛、バカラ章）第41節－と命じられていたのだ。

そして彼等の頑さは増していった。使徒は彼等に混じって「光満ちたメディーナ」で過ごした17ヵ月の後に、それに対処し始めた。その間、使徒はユダヤ教徒と同じキブラ（礼拝の方向）であるイェルサレムに向かって祈りを捧げていた。後に神は使徒にキブラを神聖なモスク（のあるメッカ）へ変えるよう命じた。そしてその後でユダヤ教徒が禁じている数々の事柄、例えば土曜日に働くことや狩猟をすること、駱駝の肉を食べること等で、それは旧約聖書（モーセ5書）以前の預言者ヤアコーブの伝統や追随の観点で行われていたものであり、それらはヤアコーブの個人的な理由により禁じていたものであったが、使徒はその禁止事項を解いてしまった。何故なら彼等に課せられていたそれらのものは、トーラーにおいては彼等の主張を裏付ける様な証拠も表示もなかったからである。だが彼等はそれを敵対行為であると考慮した。そしてこれらの出来事を通じて、クルアーンは彼等のことを愚か者であると描写した。それは次の啓示が下ったときであった「人々のうち愚かな者は言うであろう。彼

等が守っていたキブラをどうして変えたのか。言いなさい、神は東も西も所有され、神が望む者を正しい道に導かれる」－第2章（牝牛、バカラ章）第142節－

ユダヤ人の状況と現実（注：1）

ユダヤ人という人種（注：2）が一つの根源ではなく、複数の種類に帰属しているという事、例えばハバシャ（エチオピア）のファラーシャ、ゲルマン・ドイツ、タミール（黒人ユダヤ）、インド、ハザール（トルコ）（注：3）等だが、その事が確定的であるという論拠は数多くある。ユネスコが発行した「人種とは何か？」という本には次のように書かれている。

（注：1）「イエメンの歩み」誌 1985年 5号発行第72号 P. 26 参照

（注：2）トルコ系ハザール族の一部族でカスピ海西岸に居留し、後にヨーロッパに分散

（注：3）「人種とは何か？」 P. 73

「白人以外の人々が信仰したユダヤ教という宗教には、中国系ユダヤ、ハバシャ（エチオピア）系ユダヤ、アメリカ黒人系ユダヤ（注：4）が存在した。ユージン・ピットルドは「歴史と人種」という著書の中で、レーナーンの「ユダヤ人の人種はたった一つのものではなく、複数のものが存在するのだ」（注：5）という言葉を確認している。ユダヤ人種の根源が一つであるという論拠を否定して、ブリタニカ百科事典は次の様に強調している「ユダヤ人は実に彼等の生活している社会集団の特徴を取り込んでいる」（注：6）。

（注：4）「人種と歴史」P. 337

（注：5）「ブリタニカ百科事典」第13巻P. 163

（注：6）「ブリタニカ百科事典」第7巻P. 100

フラディミール・エリッツ・リネンは「現代の科学的研究は、民族的形質のみならず根源的特徴に到るまで、ユダヤ人という人種そのものを否定している。ユダヤ人が一つの根源に帰属するということや、彼等が他の民族の様に唯一の民族を形成しているということは、全く正しくない」（注：7）。

（注：7）「ブリタニカ百科事典」第7巻P. 100

ユダヤ人、ユダヤ教徒、宗教的集団に対し、シオニズムの流れやシオニストのでっち上げや行動そしてその目的との間にある大きな差異について語るときは注意が必要である。

ユダヤ教自体は明確な宗教である。ユダヤ教における史実は、全てのイスラーム教徒やキリスト教徒なら誰でも知っている。従って明白な事実を無視したり、キリスト教の為にユダヤ教が果たした役割や、イスラーム教の為にキリスト教が果たした役割を否定する者はいない。崇高なアッラーの言葉にこうある。「かくて我等ムーサー（モーセ）に聖典を授与し、

彼の後も続々と（他の）使徒達を遣わし、（特に）マリヤムの息子のイーサー（イエス）には数々の神兆を与え、且つ聖霊によって（特に彼を）支えた」（注：8）。

またこう仰せられた（注：9）「マリヤムの息子のイーサーがこう言った時のこと、『これ、イスラエルの子らよ、わしはアッラーに遣わされてお前達の元に来た者。わしより前に（啓示された）律法（トーラー）を確証し、且つわしの後に一人の使徒が現れるという嬉しい音信（たより）を伝えに来た者。その（使徒の）名はアハマド」。（訳者注）

（注：8） 「クルアーン」第2章（牝牛ーバカラー章）第87句

（注：9） 「クルアーン」第61章（戦列ーアッサッフー章）第6句

（訳者注）「アハマドはムハンマドと同語根であり、この一節はムハンマドの出現をキリストが予言していたことを示す有名な章句である。

定説ともなっているが、イエメンのユダヤ人達は世界中のユダヤ人達の間で、最も歴史が古く、紀元前586年聖地エルサレムにあった神殿に対して、第一回目の破壊が加えられる前から、既にイエメンに住んでいた。

紀元前63年、後に古代ローマ皇帝となるティトウスによるパレスティナ侵攻後、イエメンは、難を逃れて移り住んで来たユダヤ人達の避難所となった。（注：10）

（注：10） 「イスラーム以前のアラビア人達の歴史」 ジャウワード・アリー博士著
第6巻 P.60

ローマ皇帝による聖地エルサレムの神殿に対する第二回目の破壊は、紀元前70年に起こり、ユダヤ人達はそこから追い払われていた。

初期のヘブライ人達は、イラク南部のウルからカナーン（現在のパレスティナ）の地へ移った後、創世紀中「第1、6、21、34章」に見られるように、「パレスティナの地において」広範な地域を放浪した。そしてイエメンのユダヤ人達に対してパレスティナに来て、父祖伝来の地の復興と住居の建設に従事するよう協力を仰いだのであった。

しかしイエメンのユダヤ人達はこの要請を拒み、自分達の国「幸福なるイエメンの大地」に留まることを願った。そこでイスラエル人達は呪詛したのである。加えて彼等イエメンのユダヤ人達が、貧困に喘ぎ困窮に打ちひしがれる様に願う始末であった。こうしてイスラエル人達はイエメンのユダヤ人達に対して様々な術策を弄し、宗教上の行為や訓戒を楯にあれこれと脅したり、宥め好かしたりしてきた。

特に宗教上の訓戒に関して言えば、トーラーの諸聖典に記述されているもので、ユダヤ人の狂信的な思想家やラビ達により構築されたものであった。加えてトーラーに記述されている宗教上の脅迫もあった。その中には次の様な怒りに燃えた祈りすら存在している。

「汝は町において呪われ、耕作地において呪われている。その腹に宿りし者は呪われ、その地に実りし物は呪われている。入る時に呪われ、出る時には神の呪いと嫌悪が汝にある。汝

がそれを成そうと手を伸ばした全ての物において、汝の悪行の故に、汝が滅び速やかに消え去るまで、呪いが汝に課せられる。汝が我を離れようとしたら、汝が搾取しようとして入り込む土地から、汝が消え去るように、神が伝染病を汝にはりつけるだろう。

神が汝に与えた運命には結核と熱病がある。同様に炎症と渴きと腐敗がある。汝を滅ぼすまで付きまとうであろう。狂気と盲目と心の迷いが汝を支配する。全ての病と全ての苦痛は、汝が滅びるまで大天使の聖典には記されない」！！

イエメン社会生活におけるイエメン人ユダヤ教徒の影響、それは大きく顕著な影響を意味しているのだが、実際に西暦3世紀から始まったということを歴史的事実が確認している。その時期イエメンは繁栄の頂点に立っていた。ユダヤ教徒達は彼等以外の人々と同じ様に全くの自由を享受していた。故に当時海外への旅行が始まり、3世紀初頭や16世紀の第一4半世紀にはパレスティナとの結びつきをはたしている。同様に私達はシオニストの煽動以前の彼等の個人的移住やその理由についても注目することになるだろう。

西暦の最初の数世紀、ムハンマド（570年～632年）の布教までに、イエメンにおいては戦闘的ユダヤ教徒の軍事力を経験することになる。彼等は国家形態を有するようになり15、16世紀には独立したユダヤ王国を建設することが出来た。ヒムヤル人系ユダヤ教徒は、我々が既に言及してきた様に、3世紀初頭からパレスティナとの結びつきを確立することが出来たのである。

イエメンのユダヤ人について語ることは、
アラビア半島のユダヤ人について語ることである。

アラビア半島の北部ではユダヤ諸部族はヤスリブ（注:11）に居住していた。その中で最大のもの、バヌー・ナディールやバヌー・カリーザそしてバヌー・キーナカーアといった氏族であり、これら諸部族やその他のものから、更に小集団がオアシスや泉の周辺そして肥沃な涸れ川（ワーディー）に広まっていった。これら諸涸れ川には、かつてイエメンから大シリア地方へ、或いはその逆への交易路の宿营地であったワーディー・アルクラーやワーディー・ハイバルそしてワーディー・タイマー等があった。

（注:11） 現在のメディーナ

またこの地域にはユダヤ人の氏族がおり、彼等の城は丘の上にあった。彼等は「アタム」の複数形の「アターム」とそれらを名付けていたが、それらは石造建築の砦や城を意味しており、概して要塞の類に似ていた。

これは習慣であり特にイエメン人にとっては顕著であった。現在でも（実際に）人の住んでいる住居に同じ様式が見て取れる。というのもこのスタイルの手法が、安全を保障する状況を生み出すことへと帰着するからであり、またこの地方の自然環境に関連しているためで

あった。そしてこの事は、イエメンやアラビア半島の北部、また以前我々が指摘した諸涸れ川や村々についても当てはまることである。

我々は、ユダヤ人が城塞や砦そして防衛的性格を持つ住居（アルアターム）を、遊牧民の略奪から、彼等の身の安全や土地そして耕作地を守るために建設した、という言葉を確認することに対して賛同しかねる（注:12）。というのもイエメンを含めたアラビア半島において、彼等が存在している基本的理由は、より安全を求めた彼等の感情故だったからである。

（注:12）「イスラーム以前のアラビア人達の歴史」 ジャウワード・アリー博士著 第6巻 P.6

パレスティナ崩壊とエルサレムの神殿破壊（西暦70年の第二神殿の崩壊を指す）に到り終結した西暦70年のユダヤとローマの間の戦争の後に、ユダヤ人達は世界各地に離散し、ユダヤ人の中の多くが、アラブ諸国を目指したことは既に確認されている事であった。その事をユダヤ人の歴史家ユセフ（フラビウス・ヨセフス）（訳者注）が我々に語っているのだが、彼は幾つかの軍団の指揮官として、当時の戦争を経験している。またこの事はそれらの事件が記載されたアラブの資料によって支持されていることでもある。

（訳者注）「フラビウス・ヨセフス:エルサレム陥落時のユダヤ軍の指導者。ローマ軍の指導者ティトスとのガリラヤ戦闘に破れ、最後にユダヤ人を裏切りローマに降伏する。その後「ユダヤ戦争」と「アピヤヌス批判」を書く。この「ユダヤ戦争」においてキリストの死後のユダヤ人達の顛末が詳細に後世に残される」。

ローマ人達がイスラエルの子等を大シリアやクトゥルムそしてサビーヒムで征服し、ナディール族、クライザ族そしてユフディル族（注:13）は奔走してヘジャーズへ逃れていったが、ローマ人達は彼等を追跡し、彼等は大シリアとヘジャーズとの間の砂漠で喉の渇き為に滅びてしまった。（注:14）

（注:13） ユダヤ系部族

（注:14）「イブン・ハルドゥーンの歴史」第2巻 P.83 同様に「アルアガーニー」参照

また私達はユダヤ人達に対する別の側面を見てきた。アウス族とハズラジュ族（注:15）の2部族がイエメンから「大量流出」した後、ヤスリブへ移民し居住した後に、ユダヤ人達から過酷な取扱を受け耐えに耐え、そしてとうとうハズラジュ族の族長の一人であるマリーク・ブン・アルアジュラーンがシリアのガサーシナ族（注:16）の王の元へ出掛けた。そこで彼はヘジャーズへと彼の軍隊と共に帰ってきた。この時のアラブの英雄はジャバラフ・ブン・アルアイハムであり、彼はユダヤ人を懲罰（注:17）するために軍隊を率いてきた。そして神はアウス族とハズラジュ族の天秤を重くした結果、ヤスリブのアラブ系諸部族の状況は強化されることとなった。この状況故、使徒はメッカにおけるクライシュ族の害から開放されることを望み、彼はヤスリブへと向かうことになる。というのは彼の支援者（アンサール）

が沢山そこにいたからであった。

(注:15) この両部族は姉妹部族である

(注:16) ガサーシナ族とマナーディラ族はイエメンから同時に移住して来た。前者は大シリアの南部に住み着いた。彼等は有名な文明を築いたが、ダルアーの近くのブスラー・アッシューム劇場が、その繁栄の証拠として今日も残っている。

一方マナーディラ族は、イラクの南部に住み着き、彼等も同様に不滅の文明を築き上げることに参加した。

(注:17) この攻撃の間に彼等の間で80数人もが殺害された。

一方でユダヤ人達は「最高級品、豪華な暮らし、宮殿」等を独占してしまい、更にはヤスリブのみならず他の地域にも影響力を広げようとの魂胆から、巨大で重要な商業寡占体制を敷くまでになった。これに対してイスラーム興隆の前後には、アラビア部族の中心地において幾つかの反応が見られた。だが最終的には使徒がヤスリブのユダヤ人達と絆を結ぶための基盤作りを始める事となった。ユダヤ人達が奉ずる天啓の宗教には敬意を払うことを確証しつつ、(イスラームという)新しい宗教の信仰と、自分達イスラーム教徒と協力して、偶像崇拝を行う異教を粉砕するよう、彼等に呼び掛けたのである(注:18)。

(注:18) 手中に収める戦利品は山分けをするという指令が出ているが、それは実際に戦列に加わり出費を分担してのこと、という条件があった。

新しい宗教への入信を使徒が呼び掛けたので、使徒に対するユダヤ教徒の反発があった。にもかかわらず、使徒ムハンマドがイスラーム教徒とユダヤ教徒両者の間に築き上げようとした絆の真相を認めよう、と試みたユダヤ人の歴史家が何人かいる。彼等の結論はこうである。「もし使徒の指示が偶像崇拝を行う異教と戦うことだけに限られていて、使徒の音信(イスラームの教え)をユダヤ人達に承認するように迫らなければ、ユダヤ教徒とイスラーム教徒との間に争いも起こらず、ユダヤ人達が使徒の教えに対しては、敬意のこもった眼差しで眺めていただろう。偶像を破壊し、異教の偶像崇拝信仰を排除するために、彼等ユダヤ人達は使徒に、財政的と人的提供を申し出て、援助の手を差し延べたことであろう。但しそれは身と財産が危険に晒されぬという事と、新しい音信を承認せよと迫らぬことが条件であった。ユダヤ人の持つ理念というのは、自分達の奉ずる宗教から切り離される事には頑で、イスラエルの民以外の預言者の存在を認めることは絶対にしないのであった」(注:19)。

(注:19) 「アラブ諸国におけるユダヤ人達の歴史」 イスラエル・ウィルビンソン著 P. 122

それは次の様に仰せられる神の教えをアラビア人である使徒が実行するのを、彼等が平然と無視しているという事なのである(注:20)。「イスラエルの子等よ(ここからメディーナのユダヤ教徒への呼び掛けとなる)わしが汝等に施してやった恩恵を思い出すが良い。そ

してわしとの契約を履行せよ。さすればわしもまた汝等の契約を履行しようぞ。このわしを怖れ、かしこむのじゃ(40)。汝等の手元にあるもの（旧約の律法）の真理の確証としてわしが（天より）下したもの（クルアーン）を信じよ。他に先駆けてそれに不信の情を抱く様な事があってはならぬぞ。またわしの下した神兆を安値で売り飛ばしてはならぬぞ。汝等ただこのわしを怖れよ(41)。かつまた真理に虚偽の衣を被い、（悪いと）知りながら真理を包み隠してはならぬ(42)。」

（注：20）「クルアーン」第 2 章（牝牛－アルバカラ－章）第 40 句～第 42 句

イエメン北部のユダヤ人について言われている事は、その南部のユダヤ人について言われている事でもある。アデンのユダヤ人はイエメンにとって外来者ではなかった。彼等は数百年前からその都市にいて、その大部分はイエメンの北と南の 2 つの部分の様々な地区から集まって来ていた。そこで彼等はイエメンの同国人のうち、彼等以外の者達の様子に経済的な影響を受け、職を求め内部地区から移住したが、この事は取り分け、アデンが世界的に自由な地区であると公布された後の 1839 年のイギリスによるアデン占領とそこでの商業の隆盛の後で際立ってきた。

この様にして報酬を求めてアデンへやって来たそれらの者達の中で、自分達の生来の地区へ金持ちになって戻った者達は、その役割として、職だとか富だとか暮らし向きを向上させたい、と言う望みを実現させる事の為に、その地区に移住する事を奨励したのであった。この事に対してと同じ尺度で、イエメンの国外へと移住し、世界中の多くの国に定住したイエメン人達についてまで当て嵌める事が可能である。それらの国々、例えばオーストラリア、アメリカ合衆国、カナダ、またはそれ以外の国であった。

アデンは海外に向けられたイエメンの窓であり、そこへ移住する事は外国へ旅行を望む人々の負担を軽減した。それはまたイマームの政府の日常茶飯事、つまり同国人が外国への渡航許可証を得る為に支払う高額の前金からの逃避に等しいものであった。さもなければ、アデンへの移住はそこで相応しかろうが無かろうが、どんな仕事でもやる事によって、旅行費用を得る機会が豊富であると言う観点からの事であった。

この事は、もしある者が自分の村にある財産のうち彼が所有する幾らか、或いは全ての物を売り払った場合の事であるが、旅行及び移住に関する諸難問に直面して、その当時の唯一の解決方法について、彼が助言を乞い相談してきた従兄弟や親類や友人に続くためであった。

ではユダヤ人達は何処に存在し、時々彼等の人口を見積もって出す数字は、どの位であるのだろうか？

ユダヤ人はイエメン各地に彼等以外の国民達と同様に、定まった特徴無しに広がっていた。彼等の中のある者は村落に住み、またある者は町の一角に住んだり、住宅街に住んだりしていた。イエメンの歴史的な首都であるサヌアーでは、例えば、彼等の殆どは都市の西の広場の中のユダヤ人街に住んでいた。そこは今日アルフィー街として知られている。またハーシドではユダヤ人は町のあちこち、特にザリーマ周辺やマダーイ近隣、ホボールと言う町の近隣に住んでいた。同

時にイップの町では、東南に位置するアルジャーイヘ区に居住していた。アッサイヤニーでは村落、特にアルジャドスと言う名の村に、またジブラ（イップから20キロの位置にある町）ではアルカアダド地区に住んでいた。

ナーデラ地区では、近郊のジャフザーンと言う村落に住み、そこではイスラーム教徒の国民が共に住んでいた。またアデンにおいては、彼等の殆どはクレター区に居住し、ハドラマウトでは1922年にハッバーン区のみで700人が存在していた。

イエメンのユダヤ人は安全な生活を送り、様々な分野で彼等の活動を続けていた。アデンの町は、世界の様々な社会の人種全てに対して、移住に対して開放的でそれを推進し、また制限や障害がなかったにもかかわらず、（但し大英帝国の植民地主義の権益は例外で、その筆頭に来るのは植民地支配者の英国人と占領軍の安全であったが）占領地（パレスチナ）への移住が彼等を魅了することはなかった。1955年にイギリス当局が行った統計によると、アデン在のユダヤ人の数はたった5000人である事が明らかにされた。1955年の統計は次の様である。

アデン出身のイエメン人—36,910人、北部出身のイエメン人—48,088人（注21）、南部村落出身のイエメン人—18,000人、ソマリア人—10,611人、英国人—9,762人、インド・パキスタン人—15,817人、ユダヤ人—5,000人、アラブ諸国出身者—70,761人、アメリカ人、オーストラリア人、台湾人（国民党中国）—?060010人（訳者注）。

（注：21）：かつてアデン在住の者達と区別する為にイエメン人と名付けられていた。

（訳者注）：アラブ諸国の人数及びアメリカ人、オーストラリア人、台湾系中国人の数は、本文の数字の記載に不明な個所があるためにそのまま「？」を付け記載した。

一方1967年6月ロンドンのユダヤ機構では、1947年以前のユダヤ人の人口数を7000人と見積もっている。またアデン実態調査委員会の1947年12月2日付けの報告書では、8500人を確認している。1947年のアデンのユダヤ人コロニーは影響力において、最も重要な入植地の一つであった。それは経済生活及び硬貨や精錬した金を占領地や他の地域からまたはそこへ密輸するという様な彼等の経済活動に深く係っていたからである。

イギリスの占領下において、ユダヤ人の若者は、望む時にアデンとパレスチナの間を移動することが出来た。しかしながらユダヤ人の若者は、兵役を務める事、及び混乱を起こす事、諜報活動の為に占領地に行き、そしてアデンに戻ってきたのであった。既にユダヤ人エージェント達は国内に広がっており、イスラエルの諸々の貨物が存在し、イスラエルの工業或いは商業の会社の派遣員達が駐在していた。同様にアデンにはユダヤ人の徴税基金の出張署もあった。ユダヤ人はアデンでワインや金細工の商い、または買春の分野に従事したが、買春についてはイギリス占領下のアデンにおいて驚くべき有様で広まった。それは性的に異常な度合までに支持され、またアデンの商店や高級住宅街、またはこの目的の為に建てられた幾つかのテントや木製の小屋の中に独自のフィールドを持っていた。

かつてアデンはパレスチナを通じて商業の拡大を切望する者達が、そこを通じて熱心に活動出

来る大きな窓であった。パレスチナは一方ではシリア、また一方ではエジプトやイラクと言ったアラブ諸国を結び付ける単なるアーチ型の盾でしかなかった。そしてアラブのキャラバンはパレスチナの市場へやって来たり、またユダヤ人の商人達はソロモンの時代とその後もサバアへと旅をしたものだった。（注：22）

（注：22）「アラブ諸国におけるユダヤ人達の歴史」イスラエル・ウィルビンソン著P.8

この事はユダヤ人が商業の活発な地、商業的に繁栄している地区に存在している事に帰着する。イエメン内部では、アデンにおいてであったり、そこを横切ったり、そこから、或いは、そこへ、であったり、またイエメン国外であろうが、同様であった。

イエメン北部のユダヤ人の推定人口比率については、数値がまちまちで、同じ時期でさえ、各々食い違いがみられる。これは詳細な統計の結果を出していないことと、意見の枠を越えない即席の見積もりが原因である。だがこの数値がしっかりとしたものとして得られた時、初めて、占領地へ移住していったユダヤ人の集団の、完全で（具体的な）数値が把握出来る事になる。イエメン在住のユダヤ人の数はどれ程なのだろうか。

ユダヤ人の人口は紀元後当初の6世紀間で3,000人であった。（注：23）と推定している者達がいる。その中でY. R. リッチー彼は1909年にベイルートからイエメンにA. I. U(世界イスラエル連盟)の要請で、調査旅行に来たが次の様に述べている。

「当時のイエメン・ユダヤ人の数は12,106人で、150の地域に分かれて住んでおり、その内サヌアー市だけで2,774人が居住している」と言及している。

（注：23）「Scheet manop. Clip 34

1920年に初めてイエメンを訪れたアミン・ライハーニー（訳者注）は、イエメン・ユダヤ人の数を1万人であるとし、その内6000人はサヌアー市に居住する、と記述した。その後アルライハーニーは1948年にシオニストが出現する以前のイエメン・ユダヤ人の数を6万人～7万人と推定し、その内8000人はサヌアー市に居住すると見做している。

（訳者注）「アミン・ライハーニー（1876-1940）：レバノンの作家。フェリーカ村で生まれ、ニューヨークに移住。商業を営む。アラビア語と英語の著作多数。その中に「アラビア人の王様」「ナジド地方現代史」「レバノンの心」「イラクの心」「アルライハーニー全集」等がある。

ところである作家はイエメン・ユダヤ人の人口が小規模なのは、彼等が各々小さな集団で、イエメン国内の凡そ350もの村に分散しているからだとしている。（注：24）

（注：24）「アラブ諸国におけるユダヤ人達の歴史」イスラエル・ウィルビンソン著P.138

「イエメン・ユダヤ史」P.26～41翻訳